

ゴッホの絵皿!?

2014年5月26日 廣澤重穂

「さあ、依頼人の登場です」

テンションの高いお笑い芸人出身の司会者が、収録中のスタジオで甲高い声を上げた。それを合図に中央扉が開き、顔を強張こわばらせた小柄な男性が現れた。六〇歳を過ぎ、すでに頭が薄くなりかけている。

長寿番組『なんでも鑑定団』の収録だった。

「今日、お二人目のお客様は、東京からお越しの江藤信行さんです」

ナレーションの声に小さく一礼した江藤が、テレビスタジオ内に作られた舞台中央まで歩み出て、収録のために集められた公開客に向かって、もういちど頭を下げた。足が少し震えている。

「さ、こちらへ。少し緊張してらっしゃいますが、大丈夫ですか？ 鑑定の先生方は勿体もったいぶった顔をしてらっしゃいますが、あれはテレビ用の顔ですから。本当は皆さん、とても気さくな方ばかりなんです」

司会者は冗談を交えながら出演者の緊張を和らげた。

「さ、こちらへいらして下さい。先ほどのお客様は残念な結果でしたから、番組の流れから言っても、今度こそ大丈夫でしょう」

公開客を笑わせながら、司会者は中央に立つ江藤を何気なく自分の横に誘った。舞台中央にスペースを空けるためだ。やがてそのスペースに、紫の布で被われたワゴンが運ばれてきた。

「では早速、お宝を拝見しましょう」

布を両手の指でつまんだ司会者が、大袈裟にそれを引っ張り上げた。

漆黒の皿立てに立て掛けられた、直径二十センチほどの絵皿である。底の部分が日本の物より少し深くなっており、西欧のスープレ皿のようだ。濃い青で縁取りされた中央には、円形状の花が四、五本、くっきり描かれている。多弁の黄色い花びらの輪郭線が強く描かれ、生命感に溢れているように見える。

「これは？」

「南欧で作られた磁器だと聞いております……」

「どこが気に入ってらっしゃいますか？」

「菊だと思えますが、この花の大胆で自由な雰囲気、そこが好きです」

クシャクシャとした黄色い花——花の中心部が赤茶色く塗られ、その周囲に

幾枚もの濃い黄色の花びらが力強く、雑然と描かれている。

「この花ならボクでも描けそうな気がしますね」

司会者の言葉に、スタジオ内に小さな笑いが起こった。

「どうやって手に入れられたんですか？」

「はい。戦前、祖父がフランスに留学しておりまして、そこで手に入れたものだと聞いております。たまたまパリの蚤の市でこの皿を見たとき、一目で気に入って買ったそうです。父が言うには、ヨーロッパで菊が絵柄になるのは珍しいらしく、日本を恋しく感じた祖父が懐かしさのあまり手に入れたモノらしいんです」

「なるほど。それにしても戦前に留学しておられたということは、お爺さんは画家でいらつしゃたんですか？」

「画家になろうとしたらしいんですが、結局はダメだったようです。この皿は祖父の形見だからと、父が亡くなった時に受け継いだものですが、その時はあまり興味がなくて。しかしこの齢になって、画家を目指した祖父が大事にしていたものなら、それ相当の価値があるんじゃないかと……。それにこの番組の大ファンなので、冥途の土産にぜひ出演してみたいと」

「冥途の土産なんて。同じ土産ならもっとマシなものにしましょうよ。で、出演されてみて、感想はいかがですか？」

「緊張して、こんなことなら出なければよかったですと今は思っております」

二人の会話が和やかに続くなか、もってもらしく鑑定を終えた先生が席に戻って行った。実際は、収録前にすでに鑑定を終えてはいるのだが――。

それを合図に、司会者は次へと進行を移した。

「そんなことをおっしゃらずに。で、ご本人の評価額、いくらにしましょう？」

「祖父に敬意を表して三百万円で。ヨーロッパで菊が描かれたということは、何かいわれがあるのではないかと思ひまして」

「三百万ですか。これまた大きく出ましたね」

そこかしこで失笑が漏れた。

司会者もまたこの皿を信用していないのか、半笑いのまま声を張り上げた。

「では行ってみましょう。オープン・ザ・プライス！」

ドラム音が鳴り、電光掲示板の一桁から数字のゼロが並んでいく。それに合わせて「イチ、ジュウ、ヒヤク、セン、マン」と唱和の声が上がる。

万の位に「三」の数字が表示され、そこで止まる。一瞬の沈黙があり、スタジオ内に微妙な空気が流れた。

すかさず司会者がその場を取り繕うように言った。

「三万円ですか、これまた中途半端な数字ですねえ。テレビ的にどう言ったらいいのか、とても迷ってしまいます。こんな時は余計なこととは言わず、さつきとお話をお伺いした方がいいでしょう。先生、如何ですか？」

話が振られるのを待っていたかのように、鑑定士の先生がキツパリと言った。

「その皿、南フランスのヴァロリスの窯で焼かれたもので、百年から百五十年前のものでしょうか。ヴァロリスというのは、映画祭で有名なカンヌとニースの間にある町で、古代ローマの昔から陶器を焼いてきた伝統的な陶産地です。人口一万人ほどで、昔はあまり有名ではなかったのですが、一九四七年にピカソが窯を構えてから、世界的な陶器の町として知られるようになりました」

ピカソの名前が出て、公開客のあいだからどよめきが起こった。

その雰囲気を変弁するかのようには、司会者が疑問を口にした。

「しかしこの皿、ピカソが作ったわけじゃないですよね？」

鑑定士の先生は聴衆の疑問を予想していたかのように、微笑みながら言った。

「その皿、百年以上前に作られたものですから、戦後に活躍したピカソとは何の関係ありません。ただ、ピカソが気に入ってその町に窯を構えたくらいですから、作陶に関しては伝統があると言えるでしょう」

鑑定士は笑いながら更に解説を続けた。

「ヴァロリスの土は赤土で石灰分が多く、雨にさらして余計な石灰分を水に流してから成形したといえます。装飾のために白い土を器の表面に塗って絵付けするんですが、耐火温度が低いため、東洋の焼き物よりシマリがないというか、アマイという欠点があります。その代わり、色釉うわぐすりや色絵具がよく発色するので、多色の装飾技法が発達しました」

「それにしても三万円というのは、ちょっと微妙な値段だと思いませんか？」

「はい。形がしっかりしており、ちゃんとした職人によるものと推察されます。しかもヴァロリスの窯で焼かれたということで、それなりの値を付けさせていただけます。ただ、その絵がいきませんねえ。中央に描かれた花、菊だと仰いました、何だかよく分りません。百数十年前といえば明治の頃ですが、きっと東洋の神秘として菊の花を描いたんでしょう。世界博覧会でも日本の陶器が沢山ヨーロッパに輸出され、ジャポニズムが流行になっていましたから。弟子の誰かが何か新しいものを、と練習のつもりで描いたんでしょう。しかしイケません。日本だったら割ってしまうところでしょうけど、そのお弟子さん、せっかくだからと持ち帰ったんじゃないですかね。それが人々の手を経て、最

後にお爺様の手に渡ったものでしょう。江藤さんが言われるように、その絵は確かに自由な感じはします。とはいっても、やはり稚拙ですなえ」

公開客からまたまた笑いが起こった。

価格が表示された時は「それ見たことか」と冷笑する空気もあったが、会場が落ち着いてくるにつれ、いつの間にか会場の雰囲気は同情に変わっていた。

その雰囲気気を遣ってか、鑑定士の先生が言った。

「せっかくだから、使われたらいかがですか？ 皿そのものはしっかりしたものです。その皿に刺身でも載せて晩酌されれば、南ヨーロッパの青い空が見えてきて、心も和むんじゃないですかねえ」

収録が終わり鑑定団が放送されてからも、江藤は諦めきれなかった。交通事故より確率が低いと言われる宝くじでさえ、ハズレと分つても捨てるのが惜しい。そんな心境だった。

その一方で、町を歩いていても「骨董」や「古美術」「高価買入」の文字がやたらと目に飛び込んで来るようになった。これまで何気なく素通りしていた店も、「ここは骨董屋さんだったのか」と思わずガラス越しに覗いてしまう。

そんなある日、駅から自宅に戻る途中の裏通りで、「古美術 碧翠堂」の看板が目にとまった。いつものように店内を覗いてみる。

奥には鼻メガネをかけた主人らしき男が新聞を読んでいた。江藤にとっては骨董屋の主人というと和服のイメージだったが、その男はノーネクタイにチェックの上着という恰好である。何となく抵抗感が薄らぎ、思わず店内に足を踏み入れた。

とはいえ、入ってみると敷居は高い。視線の先に、太く大きな墨文字で「碧翠」と、高価そうな扁額が飾られてある。

主人と目が合い、江藤は睨まれたような気がした。後戻りしようかと思っただが、もう遅い。引き返すには目立ちすぎる。骨董好きらしい顔をして店内をのぞく振りでもしないと、出て行けそうになかった。それほど静かで、それほど客がいなかった。

そもそも江藤が足を踏み入れたのは、どうしてもあの皿に諦めがつかないからだ。本物と自分の皿がどう違うのか、高価なものを見分けがつくものなのか、本当はあの皿はいくらなのか。

江藤は、恐る恐る奥の主人に声を掛けた。

「あのおう、拝見してもよろしいですか？」

そうひと声かけるのがエチケットなのだ、とどこかで聞いたことがある。顔を上げようとしてもしない主人は、メガネの奥から低くて無愛想な声を返した。

「どうぞ」

客をひと目見ただけで冷やかしかどうか分かるらしい。

二十畳ほどの店内には、中央に一メートル四方のガラスケースが置いてある。中にアンティーク・ジュエリーが並べられ、店の目玉となっているようだ。

壁に沿って三段式の飾り棚があり、上の段には直径三十センチほどの大ぶりの絵皿が三個、ゆったりと飾られてある。そして中段には様々な小ぶりの皿が、下段には大小異なった茶碗とアールデコ風のベネチアングラスが並べてあった。

もちろん江藤に骨董の価値など分かるはずもない。有難味は感じるものの、その値段など、想像すらつかなかった。

早く店を出たい。

落ち着かない江藤が、そのとき背後から主人に声を掛けられた。

「失礼ですが、鑑定団にご出演された方では？」

「……は、はい」

どきつきとして主人の顔を見返すと、先ほどまでの冷たい視線とはうってかわって満面の笑みで江藤の顔を見ていた。そして主人は、揉み手をするかのような猫撫で声で言った。

「やはり、それで御座いましたか」

「骨董は全く素人なもので……」

逃げ出したい気分の江藤にとって、そう答えるのが精一杯であった。

「いえいえ、誰もが始めはそれで御座います。立ち話も何ですから——」

数センチも腰が低くなったような主人が、店の奥にある部屋へと案内した。

そこにもたくさんの骨董が置いてあり、こちらは店先のものより高そうだ。

応接セットが用意され、どうやら商談用の部屋らしい。

お愛想笑いを浮かべた店主が、自らお茶を用意しながら言った。

「私、あの『鑑定団』のファンでしてね」

「やはりお仕事柄？」

「いいえ、あれはお笑い番組ですから。私らにとって何ら参考になるわけではありません。ただ、出演される方を見るのが好きでしてね。喜んだり、悲しんだり、落胆したり。それに、何となく骨董に通ずるものがありそうで……」

江藤は急に恥ずかしくなった。金額掲示板に数字が出たとき、顔は強張り、目が吊り上っていた。それから急にがっかりし、最後は不貞腐れた表情をして

いたからだ。

そんな江藤の気持ちを知ってか知らずか、急に主人が言った。

「ところで、あのお皿を拝見させていただきませんか。ウチを懇意にして下さるお客様がとても気に入られましたね」

「はあ、あんな結果が出たのに、ですか？」

消え入りそうな声で江藤は答えた。

「現物を見ていないので何とも言えませんが、欲しいというお方がいらっしやいますね。見ているだけで美味しさを感じさせるようなお皿だと。しまいは何とか手に入れてくれないか、と頼まれましたね」

江藤が信じられないという表情をすると、主人は言い訳するように言った。

「一度はお断りしたんですよ。この世界、いくら狭いからといっても、テレビを見ただけでその人を探し出すのは無理で御座います。テレビ局に聞いても、出演された方の情報を教えてくれるはずありませんし」

「はあ……」

「しかし、どうしてもって言われましたね。何しろ、昔からウチの大事なお客様ですから。で、ダメモトですよと何度も念押しして、ようやくお引き受けすることにしたんです。実際にテレビ局に聞いてみたんですが、やはり個人情報保護法とかで、教えてもらえませんでした。諦めていた時にあなた様が……」

「はあ……」

「これは何かの縁ではないかと思いました」

江藤の顔が急に輝いた。やはり本物か？

「もちろん、あらためて鑑定していただければ、私としても嬉しい限りです」

「よろしかったら電話番号を頂戴できますか。その方をご紹介しますいただきますが」

主人は嬉しそうに言った。

「その方、どんな方であらうしやいます？」

「旧財閥系の未亡人でいらっしやいます。骨董がとてもお好きな方で、旦那様の代からウチをご最厚にいただいております」

「失礼なお話ですが、いかほどとか、何か仰っておられましたか？」

「これ以上はご勘弁ください。その方のご都合も御座います。金額等につきましてはお会いした時にでも。何しろ我々は、信用が第一ですから」

高い、高いと思われた敷居も、店を出る時にはすっかり低いものに変わっていた。江藤の心の鎧も融け、軽装の旅支度のような心境で、その古美術店「碧

翠堂」を出た。

その夜、帰宅した江藤はパソコンに向かった。南欧の陶器についてネットで調べるためだ。すでに家族は寝静まり、ステレオから流れるFM放送だけが静かに流れていた。

碧翠堂の店主がわざわざ客を紹介したいということは、この皿によほどの価値があるに違いない。しかも財閥系の未亡人。ひよっとして……。

手元に置いた皿を横目で見ながら、江藤はそう思った。

江藤はネット検索をかけるためにグーグルを開いた。しかしキーワードを打ち込む段になり、ハタと手が止まってしまった。

「えーっと、何という町だったか。確かピカソが窯を開いたという……」

目を閉じ、すっかり衰えがちな記憶力にカツを入れる。しかし鑑定師の言った町の名前がどうにも出てこない。あのときは金額ばかりが気になり、鑑定士の言葉などまったく残っていなかった。頭にあるのは、あの皿が百年以上前に焼かれたもので、ピカソの窯がある町だということ。それだけだった。

手始めに、検索ワードに「ピカソ」と入れてクリックしてみた。

検索一覧のトップに、ウィキペディアの「パブロ・ピカソ」の項目が表示された。何か分かるかもしれないと開いてみるが、彼の年表の一九四七年に「陶器制作」と書かれてあるだけで、その町名までは記されていない。

今度は「ピカソの陶器」と入れてクリックしてみた。

ピカソの陶器が鑑賞できる展覧会や美術館の告知ばかりで、肝心の町の名前に行き着くことが出来ない。あつちをツクツク、こつちをツクツク。とはいえようやく町名を突き止めることが出来た。窯の名前がマドウーラ窯、そして町の名前がヴァロリス。

すでに三十分以上経過している。

今度はキーワードに「ヴァロリス」と入れて検索してみた。

十六世紀初頭にイタリアの陶工たちが移り住んだ町ヴァロリスは、長年におたって地味な日常雑器を作ってきた。陶器制作に適した地質だったため、その町名は古代ローマ語の「黄金の谷」に由来するという。そして、世界的な陶器の町として知られるようになったのは、ピカソが窯を構えてからだという。

ピカソに関する記述は多く、それによると彼の作品数は二千以上にもものぼるという。戦後間もなくこの町で開かれた展覧会では、北大路魯山人や加藤唐九郎の作品も展示されたらしい。シャガールやミロも訪れており、陶器の町とし

てすこぶる有名なようである。

やはりヴァロリス産は価値があるらしい。とはいえ、この皿が焼かれた一九〇〇年前後の記述が見つからなかった。

パソコンから目を離し、横に置いた皿を恨めし気に見た。

「ピカソの作品だったらなあ……」

あらためて検索をやり直す。

今度のキーワードは「一九〇〇年前後、欧州の陶磁器」「日本の陶磁器との関係」などだ。どうやらこのころは、欧州の陶芸界は変化の時期だったらしい。黒くて太い輪郭線で動植物が描かれ、ジャポニズムの影響が強かった、と記述されてある。

また、職人が作陶した器に画家が絵付けを始めたのもこの頃からだという。花は単なる静物としての花ではなく、活き活きと咲き乱れる景色の一部のように。バルビソン派の絵画様式も取り入れられるようになったという。

「陶磁器だけに、変化の時期ってかあ」

下手なオヤジギャグで検索疲れの自分を励まし、必死に画面を睨み続ける。

とはいえ、なぜ未亡人があの皿に興味を持ったのか、そのヒントすら見つけられなかった。

初心に帰ろうと、江藤は再び「ピカソと陶器」を検索した。

と、幾つか開くうちに「ピカソの陶器と日本の磁器」という論文に出くわした。それによると、「何でも盗むものがあれば、私は盗む」と公言してはばからなかったピカソが歴史上の多くの名画や作家からその構図やテーマや発想や技術を自分の芸術に取り込み、彼の芸術を発展させてきたという。その中にはゴヤやドラクロワ、マネ、ゴーギャンの名も挙がっている。

陶芸繫つながりで言えば、陶器に魅せられたというゴーギャンの影響が大きかったのだろう。また、ピカソがヴァロリスに住みついたのは、地元に住む陶芸家との出会いにあったからだという。

とはいえ、自分の皿に関する記述は見当たらない。

「やはりダメか……」

江藤はしよぼついた目を指で押さえ、椅子から立ち上がった。すでに時計は、深夜の二時を回っている。

頭の中は、ピカソ、ヴァロリス、フランス印象派、画家、南欧、イタリア、地中海、青い空、太陽……、ぐるぐる回っている。

江藤はひとつ大きな欠伸をすると、改めて脇に置いてあった皿に手を伸ばし

た。どうしても未練を断ち切ることが出来ない。上下にふつてみたり、中指の拳で叩いたり、裏返してみたりしながら情けない気持ちで見つめた。

と、何かが頭に閃いた。

江藤はもういちど絵皿を覗きながら、ひっくり返してみた。

「あっ！」

ヒマワリだ！ クシヤクシヤした絵柄はヒマワリだ！

ヒマワリといえばゴッホ。南仏のアルルにやって来たゴッホは、ゴーギャンとも交流があった。地図を見ると、そのアルルはヴァロリスとも近い。

ゴッホがアルルに来て、南欧の空の青さに感激したに違いない。アルルの麦畑や跳ね橋を描いたゴッホであれば、写生旅行に、同じ南欧のヴァロリスを訪ねても不思議はない。しかも日本の浮世絵好きだったゴッホはジャポニズムの影響を受けている。

皿が急に神々しく見えてきた。

鑑定団の誰もが、ゴッホなど想像すらできなかったであろう。そんな彼らが、正確な鑑定など出来たとは思えない。

この皿、ゴッホの「ヒマワリ」だ！

「お忙しい所をお出で下さいまして有難う御座います。ご婦人がお待ちです」

「確か、十一時のはずですが？」

「はい。お約束の時間は十一時なんです、早くお見えになられました。それほどお楽しみにされてらっしゃるんでしょう。で、お約束の品、お持ちいただきましたか？」

江藤は手にした風呂敷包みを店主に見せた。

「はい、ここに」

「意外に小そう御座いますな」

「テレビとは違って、本物はこんなものです」

数日前、例の未亡人が来店されるので件の皿を見せてほしい、という電話が店主からあった。江藤は緩衝材入りの、小ぶりの段ボール箱に「ゴッホ」の絵皿を入れ、風呂敷に包んで碧翠堂を訪ねたのである。

平日の午前とあって、この日は特に店内に客はいない。

「さ、江藤さん、奥の方へ」

挨拶もそこそこに、店主は江藤を奥の応接室へと案内した。

すでに婦人はソファに深々と腰を下ろし、ペットの猫を抱えて待っていた。

白髪に薄化粧の顔、落ち着いた萩柄の和服姿、どこことなく気品がある。当然のようにペットを抱くその姿は、成り金ではない、生来の金持ち貴婦人というオラがあつた。

二人がソファに近付くと、店主が江藤を紹介した。

「松村様、こちら、江藤さんと申されて、皿の所有者でいらっしやいます」

「はじめまして、松村と申します。そしてこの子がエリザベス」

座ったままの婦人がペットの猫を抱えたまま、軽く頭を下げた。

店主は江藤にソファを勧めたあとで、あらためて松村婦人を紹介した。

「松村様は旧子爵のご家系で、昔は幾つも会社を経営なさつてらっしやいました。すでに亡くなられましたが、旦那様は骨董の造詣に深く、多くの骨董を所蔵なさつておられました」

「いいでは御座いせんか、そんな昔話し。そうようねえ、ベスちゃん。それより、早くあのお皿、見たいわよねえ」

婦人は優しくペットの咽を撫でながら、その顔に笑顔で語り掛けた。

△字型の顔にぴんと張った薄い耳、長くて美しい四肢、可愛く細い尻尾、そして何より印象的なサファイアブルーの瞳。婦人のペットに相応しく、そのシヤムネコは気高さを見せるかのようにツンと澄まし顔をして見せた。

「奥様、失礼いたしました」

店主はそう言つて頭を下げると、江藤の方を向いた。

「江藤さん、早速ですが、見せていただけますか」

膝に抱えていた風呂敷包みをテーブルに置き、江藤はゆっくりと結び目を解いた。それからふたを開けて皿を取り出すと、空き箱を脇にやつて風呂敷包みの上に置いた。

「あつ！」

婦人が小さく叫び声を上げた。エリザベスが皿の上に飛び乗つたのだ。

「これ、ベスちゃん、いけません」

ペットを叱りながらも婦人の目は笑っている。

「ほらね、この子、とてもこのお皿、気に入っているのよ。江藤さんでしたわね、あなたがご出演された時も、このお皿が出て来た途端、テレビに向かって鳴いていましたのよ」

エリザベスをだき抱えて自分の膝に乗せてから、婦人は両手でその皿を改めて手に取つた。

「いいわねえ、このお皿。心が和むわ。重さもちょうどいいし」

ひとしきりその皿を眺めた婦人が、テーブルの上に戻しながら言った。

「江藤さん。このお皿、譲っていただけませんかしら」

「譲ってと言われましても……」

江藤は口ごもった。金額に関して全く見当もつかない。「ゴッホ」の皿に値段の付けようがないのだ。億とは言わないまでも、せめて四ケタ後半だと思っている。とはいえ、口に出すこともできない。

その表情を読み取った店主が気を回した。

「奥様、いかほどとお考えでらっしゃいますか？」

「金額なんて、私の口からは言えませんわ。はしたない。あとはご主人にお任せします」

「これは困りましたな」

話を戻され、店主もまごついてしまった。しばらくして、

「では、これでいかがですか？」

店主は、指を一本立てた。

江藤の顔が曇る。ゴッホの皿が一千万円のはずがない。

店主はチラッと夫人の顔を見た。

婦人は軽く微笑み、ゆっくり肯いた。

店主も婦人に肯き返す。

「私には、いくら何でも高過ぎると思うのですが、奥様が仰るならこれでいかがですか？」

店主は、今度は指を三本立てて、江藤の顔を覗いた。

その表情は曇ったままだ。

「江藤さん。こない話、そう滅多にあるものじゃあ御座いません」

「ええ。とても有難いお話なんですけど、しばらく考えさせてもらえませんか。

数日前より急に愛着が湧いてきて、手放すのが惜しいような……」

そのとき、婦人に抱えられたペットが、ニヤーンと悲しげに鳴いた。

「ほら、この子だって残念だって言ってますわよ」

その日の夜、信楽美術館の学芸員と名乗る男から電話があった。

「テレビで拝見したんですが、鑑定団に出されたあの皿、一度拝見させていただけませんか。いま私、南欧の陶芸展というのを企画しております。もし出品をお願いしましたら、出していただけるかどうか。もともと私の企画が通れば、の話ですが。いかがが御座いましょう」

「もちろん、喜んで」

江藤は確信した。やはりこの皿はゴッホの「ひまわり」に違いない。テレビだったとはいえ、美術館の学芸員が興味を示したのだ。

その夜、江藤はすぐに碧翠堂の店主に断りの電話を入れた。

その電話を受けた店主が、すぐさま松村婦人に電話を入れた。

「奥様でらっしゃいますか？ 先ほど、江藤さんから電話がありまして、やはりお譲りするのは難しいと」

「残念ですわねえ。ベスちゃんのお気に入りだったのに。きっと悲しむわ」

「それにしても冷や冷やしました。奥様が、あんな皿に三十万も出していい、と仰るんですから」

「いいえ、五十万でも惜しくはありませんことよ。だって、可愛いこの子のためなんですもの。あの皿で、ベスちゃんが喜んでお食事さえしてくれれば、おカネなんかどうでもいいじゃありませんか。ねえ、ベスちゃん」

そう言いながら婦人はシャム猫のエリザベスを抱き上げ、目尻を下げて頬ずりした。

なお後日、あの学芸員からお詫びの電話が江藤のもとに入った。

南欧の陶磁器展といえばピカソが欠かせない。しかしピカソを呼べるだけの資金がその美術館にはなかった。学芸員が企画した「生活に活きづく南欧の陶器展」では地味すぎると、企画そのものがボツになったのだ。

ひとは江藤氏のことを笑うかもしれない。

しかし、陶器に魅せられたゴーギャンをわざわざアルルに呼び寄せたゴッホが陶器に興味を示さなかった、という証拠はない。日本の浮世絵が好きだったゴッホが菊らしき花を描かなかった、という保証はない。そして、油彩八百点、水彩・素描・スケッチ等千点を描いたゴッホが陶磁器を画材代わりに使わなかった、という確証はないのである。

真偽のほどは定かではない。

(10,500字)

注：旧タイトル『価値の研究』ではさらに「理屈っぽい」という多くのご批判を受け、新タイトルを、林孝氏のアイデアをいただいて『ゴッホの絵皿!』とさせていただきます。